

関東大震災

と 無線電信

(磐城国際無線電信富岡局の活躍)



片寄 洋一

はじめに

かつて、JR 原ノ町駅（常磐線・福島県）の東側に巨大な塔があった。国道六号線沿いにある道の駅がその跡地で、駐車場に隣接して市民憩いの公園になっており、其の一角に美しい花時計と往事を偲ぶ案内板があり、更に道路を隔てたところに 1/10 の記念塔が建っていた。

もう 90 年近くも前になるが、大正時代ここに東洋一（200 m）の高さを誇る無線塔が建設され、塔を中心としてアンテナ群を張り巡らし、大きな二階建ての建物の中には長波送信設備の心臓部である主直流電動機により駆動する電機子（回転子）だけでも 16 トンという巨大な送信機が設置されていた。我が国初の対米無線電信局として発足した磐城国際無線電信局原ノ町送信所がここにあり、そして富岡町深谷の高台に富岡受信所があって送受二局が一組となって、我が国唯一の国際無線電信局を構成していた。全ての門戸を閉ざしていた江戸時代の鎖国政策から、一転して文明開化の明治時代に入ると西洋文明が一気に流れ込み、和魂洋才をモットーに欧米の先進技術を学び取ろうと必死に努力し、やがてその甲斐あって欧米に近づくことができ、かつ日清、日露戦争に勝利し、世界の先進国家の仲間入りに近づいたが、どうにもならないのが我が国の地理的位置で欧米から遠く離れた極東の端に存在し、それだけ情報の伝達には時間を要していたことが悩みであった。



国と国の関係はより密接となり、情報の交換もより速く、より多くが求められるようになった時に、遠く離れた我が国は欧米先進国から一人取り残されたような焦燥感が政府内に渦巻き、其の解決策を模索していた。

その当時、外国との連絡手段は海底ケーブルを利用した有線通信で、無線電信は伝搬距離が短く、一部の隣接した外国とは可能だったが、一般的ではなかった。

更に海底ケーブルによる通信にも問題があり、それは海底ケーブルが全て外国通信社の所有だから、機密漏洩、妨害工作等が懸念され、また故障した場合、修理には長時間を要し、外に連絡手段がないのでその対策に政府は苦慮していた。

そこで我が国は独自で太平洋横断の海底ケーブルの敷設を計画したが、アメリカ側の陸揚げをアメリカに本社のある太平洋ケーブル社の妨害工作で拒否され、まさに八方塞がり状態で、打開の途を模索していた。